

報 告

作業療法学生 of 社会参加と社会交流技能の関係

山 川 敦 史¹

抄 録

作業療法学生 of 社会参加と社会交流技能 of 関係を明らかにすることを目的に、作業療法学専攻 of 大学生 3 年次生、4 年次生 85 名を対象に、質問紙による社会参加に関する調査および社会交流技能に対する KiSS-18 を用いた主観評価ならびに社会交流評価 (ESI) を用いた観察による客観評価を行った。36 名から質問紙および KiSS-18 の回答が得られ、23 名に ESI を実施できた。社会参加に関する質問紙と KiSS-18、ESI の全調査を実施できたのは 22 名であった。

KiSS-18 ならびに ESI において、アルバイトを経験した学生は、していない学生よりも社会交流技能が有意に高かった。所属した集団において、イベントや活動のとりまとめを経験した学生は、その他の役割を経験した学生よりも、社会交流技能が有意に高かった。KiSS-18 合計点と ESI の結果には高い相関関係があった。社会活動や集団における役割が、作業療法学生 of 社会交流技能にとって重要であるという示唆が得られた。

Key words: 作業療法学生, 社会参加, 社会交流技能, 社会交流評価 (ESI)

1 緒 言

世界作業療法士連盟は、作業療法 (Occupational Therapy: 以下 OT) について、作業を通して対象となる人の健康と安寧を促進するクライアント中心の保健専門職である¹⁾、と声明書で述べている。対象者の視点を尊重し、その人にとってしたい、する必要のある、することを期待されている作業に結びつくことができるよう協働して方略を立て、実践していく。そのためには専門的で質の高い社会交流技能が必要となる。日本作業療法士協会は、養成教育の目標として 1956 年に Bloom が提唱した「教育目

標分類 Taxonomy」を導入し、「精神運動領域」「認知領域」「情意領域」の 3 領域を教育の対象²⁾として提示している。渥美らは、養成教育や臨床実習の目的が、認知領域と精神運動領域に偏重しているために情意領域の指導機会が少なく、学生が目標をイメージしづらいため、教育達成度が低くなる傾向がある³⁾と指摘している。社会交流技能は、これら 3 つの領域のうち「情意領域」に相当する。

日本作業療法士協会は「臨床実習の手引き (第 4 版)」において、現在、臨床実習を経験している世代は、2003 年度学習指導要領による学校教育を受けた、いわゆる「ゆとり世代」であり、「生真面目」「人に優しい」など肯定的な特徴がある一方で「主体性や積極性に乏しい」「ストレス耐性が弱い」「対人関係能力が低い (他者との適切な距離がとれない)」など臨床実習の遂行を困難にする可能性のあ

受稿: 2019 年 1 月 9 日 受理: 2019 年 4 月 23 日

¹ 広島都市学園大学 健康科学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻
広島市安佐南区大塚東 3-2-1

る否定的な特徴がある⁴⁾としている。長家らは、看護学生のコミュニケーションに関連する調査の中で、学校教育のあり方、少子化・核家族化という社会的傾向に加えて、地域での人付き合いの希薄化、価値観や経験の多様化に伴う集団行動の機会の減少、コミュニケーション能力を育む他者との生活や共通体験が減少している⁵⁾とし、学生にとって身近な社会における体験が、コミュニケーション能力の形成に影響を与えることを示唆した。井芹らは、学生が以前にどのような集団に所属し、どのような体験をして今に至ったのかなどの状況を詳細に聞き取るなど社会交流技能の学びに関する質的な側面の検討が必要だ⁶⁾と述べている。

実体験が少なく対人交流に不安を抱えて臨床実習に臨んだ結果、学生たちが実習中に示す問題として、原らは「報告、連絡、相談ができない」「患者に対する接遇や状況に応じた行動ができない」「他スタッフと関わったり、コミュニケーションがとれない」⁷⁾などを挙げている。このような社会交流を中心とした学生の問題の背景を理解し、作業療法士として、より望ましい技能を獲得できるよう支援するためには、臨床実習に臨むまでの大学内の取り組みにおいて、学生が示す社会交流技能と、学生の生活・集団行動体験、特に社会交流技能と結びつくと思われる社会参加経験の関連を知ることが必要と思われる。本研究では、質の高い社会交流技能を持つ学生は、そうでない学生に比べて、より社会性を求められる場面に参加した経験があると仮定し、社会交流技能が高い学生は、具体的にどのような社会参加を経験し、対人交流においてどのような役割を果たしてきたのかを調査する。

なお、本稿で用いる用語について、以下のように定義する。

1.1 社会参加

社会参加という言葉には、世界保健機関（WHO）の国際生活機能分類（以下 ICF）の定義が用いられることが多い⁸⁻¹⁰⁾。ICF では、参加を「生活・人生場面への関わり」と定義し、人が関わる環境的因子には、家庭や職場、学校などの身近な「個人的環境」と、コミュニティやサービス、制度などを示す、よ

り広範な「社会的環境」がある¹¹⁾としている。本稿では、対象となる OT 学生が日常的に関わることの多い環境として、家庭と大学およびアルバイト先やサークルなど個人的な環境を対象とし、これらに関わっていくことを社会参加とする。

1.2 社会交流技能

学生が家庭や大学、アルバイト先などの個人的な環境へ関わっていく中で、人と接していくときには社会交流技能が必要になると考えられる。菊池は、相手から肯定的な反応をもらい、否定的な反応をもらわないようにするための、相手と直接会って行われるやりとりで発揮する対人関係を円滑にする技能を社会的スキルとして位置付けている¹²⁾。藤本らは対人関係に主眼を置いた能力をソーシャル・スキルと呼び、さらに言語・非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力をコミュニケーション・スキル¹³⁾としている。

OT 教育においては、渥美らは社会的交流技能の実習前教育プログラムに関する研究の中で、「自己紹介や挨拶ができる」、「困ったときに指導者に相談する」といった、基本的な「一般的交流技能」と、将来、作業療法士として発揮することを期待される、学習目標としての対患者技能である「専門的交流技能」とに区分し、これに、知識や技術についての項目が組み込まれた全体として、社会的交流技能を定義³⁾している。

本稿では、臨床実習前の大学内での教育に焦点を当て、学生の社会交流技能についての学生自身による主観的な側面と、教員等が観察した学生の社会交流技能の客観的な側面の2つに着目する。主観的側面は菊池、藤本らと同義とし、客観的側面については Fisher による「社会交流を含んだ課題を遂行するときに、他の人と会話し交流するときの作業遂行の質を表す観察された活動」の定義¹⁴⁾に従い、いずれについても社会交流技能という用語を統一して用いるものとする。

2 目 的

本研究の目的は、OT 学生の社会参加と社会交流技能の関係を明らかにすることである。社会参加の

経験が豊富な学生は、高い社会交流技能を示すのか、自らの社会交流技能の主観的評価と、交流場面において観察される客観的評価とに関連があるのか検証する。

3 対 象

H 市内に位置する作業療法学を専攻する大学 3, 4 年次生 85 名（3 年次生 45 名, 4 年次生 40 名）を対象とした。これらの学年は、臨床実習を含めアルバイトやボランティアなどによる社会参加を多く経験していると思われるため、社会参加と社会交流技能の関係を調査する本研究の対象に適していると考えた。

調査の期間は、3 年次生は「基礎臨床実習（3 週間の評価実習）」の前後 1 ヶ月、4 年次生は 9 週間の「総合臨床実習」を終えて、それぞれの実習施設との連絡を担当した大学教員と実習で取り組んできたことの反省と、卒業研究のまとめに入る時期であった。研究の説明やアンケートへの回答、回収の便宜を考えて、3 年次、4 年次ともできるだけ多くの学生が大学に集合できる期間として、上記を調査期間として設定した。

4 方 法

4.1 調査期間

平成 29 年 9 月から 12 月末までを調査期間とした。

4.2 調査内容

横断的研究デザインを用いた。社会参加については筆者が作成した質問紙による調査を実施し、社会交流技能については、標準化された評価法を用いて主観的側面、客観的側面を評価した。

4.2.1 社会参加

クラブ・サークル活動については、「スポーツ」「芸術」「ボランティア」など具体的な種目の中から経験してきたものを複数選択する形とした。アルバイトに関しては、対象者が経験したことのある業種を「家庭教師」「事務」「販売」「飲食業」などの中から複数選択できる形式とし、アルバイトの頻度を「不定期」「1～2 週間」「3 日以上／週」、長期間同じ

アルバイトを継続した場合の期間を「半年未満」「半年以上～1 年未満」などの選択肢とした。これらの選択肢は日本学生支援機構の学生生活調査¹⁵⁾に用いられているものを一部取り入れ、該当するものがない場合に自由記載を求めた。

集団内での役割については、参加したことのある場面として「生徒会・自治会」「子供会」などから複数選択する形とし、果たした経験のある役割について「リーダー」「企画」「イベントや活動のとりまとめ」などの選択肢から複数回答する形とした。日常的に関わることの多い人の年代について「小学生」「中学生」や「専門・大学生」「60 代以上」などの選択肢を設けた。

調査にあたっては、授業終了時など対象となる学生が集合しているときに筆者が一斉に配布し、内容を説明するとともに記入を依頼した。可能な場合はその場で回収し、時間を必要とする学生については、後日研究室に持参するよう促した。

4.2.2 社会交流技能

1) 主観評価

主観評価の尺度として、菊池による Kikuchi's Social Skills Scale 18items（以下 KiSS-18）¹⁶⁾を用いた。KiSS-18 は、臨床心理学者 Goldstein らによる「若者のための社会的スキル」のリストをもとに開発された、社会交流技能の主観評価尺度である。「初歩的なスキル」「より高度のスキル」「感情処理のスキル」など 6 領域にそれぞれ 3 項目ずつ、合計 18 項目で構成される。「Q-1：他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか」「Q-5：知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」などの質問に対し「いつもそうだ」「たいていそうだ」「どちらともいえない」「たいていそうではない」「いつもそうではない」の 5 件法で回答する。得点は 18 点から 90 点に分布し、得点が高いほど社会交流技能の主観評価が高いことを示す。なお、菊池は尺度を利用するに際し、合計点だけを取り扱い、上述した 6 領域別の得点は取り上げない¹⁷⁾としている。

本研究では社会参加の質問紙と一緒に印刷し、対象となる学生は社会参加に関する質問紙に続けて KiSS-18 に回答した。

2) 客観評価

客観評価には、社会交流評価 Evaluation of Social Interaction (以下 ESI)¹⁸⁾ を用いた。ESI は交流の間に観察されたことに基づいて「Approaches/ Starts 近づき, 始める」「Gesticulates 身振りで伝える」「Expresses Emotion 感情を表現する」など 27 種類の技能項目を 1 (重度に制限) ~ 4 (有能) の 4 段階で評価する。採点の結果は、交流が行われた時間帯、物理的環境への慣れ、社交相手の人数や特徴などの情報とともに処理され、ロジット (logits) を単位とする測定値として算出される。結果は対象者と同年齢の健常者の平均および範囲と比較することができる。

本研究では、ESI の認定評価者である筆者によって、調査期間に大学内で行われた講義におけるグループディスカッション、講師と学生のやりとりの様子や、学生同士の社会交流の場面で実施した。

5 統計解析

社会参加に関する質問紙の各設問で、経験が「ある」「ない」の 2 群間の比較に際し、KiSS-18 には Mann-Whitney U 検定を用いた。ESI は 4 件法で採点された結果に、観察環境や交流相手の情報等を含めてコンピュータ解析が行われ、ロジットで示された直線上の位置で数値として得点化されるため t 検定を用いた解析を行った。3 群以上の比較では、KiSS-18 には Kruskal-Wallis 検定を、ESI には一元配置分散分析を行った。ESI の高い群、低い群の比較には、カイ二乗検定を用いた。KiSS-18 と ESI の相関検定には Spearman の順位相関係数を用いた。各検定の有意水準を 0.05 とした。

統計解析ソフトには、EZR version 1.36 を使用した。

6 倫理的配慮

個人情報の取り扱いについて、質問紙に識別用の ID を割り当て、同意書のみで個人と照合できるものとした。観察による客観評価は、実際に授業等で行われる交流場面で行うことを原則とし、筆者は評価者として実際の交流には関わらないことを説明した。

参加は任意であって強制されないものであること、観察されることによる心理的負担を感じた場合、いつでも研究協力を撤回できること、参加をしないことによる大学内での処遇や成績、単位取得に影響がないことを書面および口頭にて説明し、同意書によって同意を得た。

7 結果

7.1 社会参加の状況

対象者 85 名のうち同意書の提出があったのは 53 名で、社会参加の質問紙に回答したのは 36 名 (男性 16 名, 女性 20 名, 平均年齢 21.39 ± 2.59 , 有効解答率 68.2%) であった。

クラブ・サークル活動に関して、スポーツ 32 名, 芸術 8 名, 音楽 13 名, ボランティア 13 名, そのほか 7 名で、36 名全員が何らかの活動を経験しており、種目ではスポーツが最も多かった。

アルバイトの経験があるのは 32 名で、4 名は経験がなかった。業種は、家庭教師 2 名, 事務 1 名, 販売 11 名, 飲食 19 名, 軽労働 5 名, 重労働 3 名, 特殊技能 2 名, 接客 17 名, そのほか 4 名であった。アルバイトの頻度は、不定期 2 名, 週に 1 ~ 2 日が 8 名, 週に 3 日以上が 21 名, それ以外が 3 名であった。同じアルバイトを最も長く継続した期間は、1 年未満 3 名, 1 年以上 ~ 2 年未満は 8 名, 2 年以上 ~ 3 年未満が 15 名, 3 年以上が 6 名であった。

所属した経験のある集団に関しては、生徒会・自治会 8 名, 子供会・町内会 23 名, 学習塾 19 名, ボーイスカウト・ガールスカウト 3 名, 習い事など 24 名, そのほか 1 名で、1 名が所属の経験がないと答えた。集団での役割については、リーダー 11 名, 企画 2 名, 人や物品の管理 7 名, イベントや活動のとりまとめ 10 名, 準備や環境の調整 6 名, 交渉 4 名, 参加 15 名であった。参加を選じた学生のうち、役割の経験がない学生は 10 名であった。

日常的に関わることの多い交流相手の年代として、就学前児 1 名, 小学生 2 名, 中学生 2 名, 高校生 5 名, 大学生 36 名, 20 ~ 30 代 3 名, 40 ~ 50 代 6 名, 60 代以上 3 名であった。日常的に関わるのは大学生がほとんどと答えたのは 25 名であった。

7.2 社会交流技能の主観評価

KiSS-18 は社会参加についての質問紙と同じ 36 名から回答が得られた。KiSS-18 の平均値は男性 56.81, 女性 59 であり, 大学生の標準化資料による平均値 (男性 53.08, 女性 54.35)¹⁷⁾ をいずれも上回る結果となった。Kruskal-Wallis 検定を用い, 有意水準を 0.05 として解析を行ったが, KiSS-18 と性別や学年との間に統計学的有意差は見られなかった (Table 1)。

Table 1 性別および学年間における KiSS-18

KiSS-18	性別	
	男性 (16)	女性 (20)
	58.5(50.75-64.25)[34-74]	59.5(52.75-63.25)[49-79]
	学年	
	3年生 (14)	4年生 (8)
	60(52-64)[34-74]	57(53-67)[50-79]
	平均値 (25% - 75%) [最小値 - 最大値]	

7.3 社会参加と社会交流技能の主観評価

以下に, 質問紙で得られた学生の社会参加の状況と KiSS-18 との関連を, Kruskal-Wallis 検定を用い, 有意水準を 0.05 として解析した結果を述べる。クラブやサークル活動としてスポーツ, 芸術, 音楽, ボランティアを経験した群と経験していない群との間に KiSS-18 の統計学的有意差は認めなかった。

アルバイトの業種に関しては, それぞれ経験した群と経験していない群とに KiSS-18 の統計学的有意差は見られなかったが, アルバイトそのものを経験したことの無い群と経験した群には有意な差を認めた ($p=0.0177$)。アルバイトの頻度, 同じアルバイトを最も長く継続した期間の長さによる有意差は見られなかった。

生徒会や自治会, 学習塾, ボーイスカウト・ガールスカウト, 習い事やスポーツクラブなどには, いずれも所属経験のある群とない群との間に KiSS-18 の統計学的有意差は認められなかった。しかし, 子供会・町内会への所属経験に関しては, 経験のない 13 名のほうが, 所属経験のある 23 名より, KiSS-18 が有意に高い結果となった ($p=0.0205$) (Table 2)。

所属した経験のある集団において, イベントや活動のとりまとめを経験した群は, 経験していない群よりも KiSS-18 が統計学的に有意に高かった ($p=0.00489$)。リーダー, イベントや活動のとりまとめ,

Table 2 集団所属の有無と KiSS-18

クラブ・サークル	経験あり		経験なし	
スポーツ(32)	60(52-64)[34-79]		56(52.25-60.25)[50-64]	
芸術(8)	54.5(52-59)[34-61]		60.5(52-64.25)[42-79]	
音楽(13)	55(52-61)[49-79]		60(53-64)[34-74]	
ボランティア(13)	61(52-65)[49-74]		59(52.5-62.5)[34-79]	
アルバイト	64(54-64)[42-79] ※		51(46-52.25)[34-53]	
	家庭教師(2)	64.5(64.25-64.75)[64-65]	59(52-63.75)[34-79]	
	販売(11)	59(53-62.5)[45-68]	60(52-64)[34-79]	
	飲食(19)	61(54-64.5)[42-79]	59(52-61)[34-69]	
	軽・重労働(5)	64(61-67)[59-69]	57(52-63.5)[34-79]	
	接客(17)	60(54-64)[45-67]	59(52-64.5)[34-79]	
集団所属	生徒会・自治会(8)	58.5(51.25-64.25)[47-69]	60(53.5-64)[34-79]	
	子供会・町内会(23)	57(52-60.5)[45-69]	64(59.25-65.5)[34-79] ※	
	学習塾(19)	60(54.5-64)[34-74]	56.5(52-64.25)[45-79]	
	ボーイスカウト ガールスカウト (3)	61(60.5-64)[60-67]	59(52-64)[34-79]	
	習い事など (24)	60(53.75-64)[45-79]	59(52-62.5)[34-74]	
役割経験	リーダー (11)	64(54.5-68.5)[34-79]	59(52-61)[42-67]	
	企画 (2)	48(47.5-48.5)[47-49]	60(53.25-64)[34-79]	
	人や物品の管理 (7)	61(58.5-62.5)[34-64]	59(52-64)[42-79]	
	とりまとめ (10)	64(61-67.75)[52-79] ※※	54.5(52-60.75)[34-74]	
	交渉 (4)	63.5(58.5-67.5)[54-69]	59(52-64)[34-79]	

平均値 (25% - 75%) [最小値 - 最大値]。

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

Table 3 役割経験の有無と KiSS-18

KiSS-18	集団での役割経験	
	あり (26)	参加のみ (10)
	61(55.5-64.75)[34-79]	52(50.5-53.75)[42-64]
	より社会交流技能を必要とする役割	
	経験あり (19)	それ以外の役割 (17)
	61(54.5-66)[34-79] ※	54(52-60)[42-64]
	交流相手の年代	
	異世代交流 (11)	大学生のみ (25)
	60(56.5-64)[45-79]	57(52-64)[34-74]

平均値 (25% - 75%) [最小値 - 最大値]。

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

交渉の3つの役割を「より社会交流技能を必要とする役割」と捉えてまとめ、これを経験した群と、それ以外の役割を経験した群とで比較したところ、KiSS-18が有意に高い結果となった ($p=0.0222$)。日常的に交流する交流相手の年代について、大学生が中心であると答えた群と、異世代交流のある群とでKiSS-18に有意な差は認めなかった (Table 3)。

7.4 社会交流技能の客観評価

ESIを実施できたのは23名 (男性11名, 女性12名, 平均年齢 21.43 ± 2.58) で, ESI 平均値は 1.2 ± 0.35 ロジットであった。性別および学年によるESIの得点をt検定にて有意水準0.05で解析した結果, 統計学的有意差は見られなかった。ESIと観察された社会交流技能の傾向を明らかにすることを目的に, 平均値以上の学生をESI高群, 平均値未満の学生をESI低群として比較したところ, 以下のような結果となった (Fig. 1)。

	ESI高群 (重度に制限)				ESI低群 (有能)			
	1	2	3	4	1	2	3	4
Touches								
Thanks								
Discloses	1	1	0	20	0	1	0	23
Empathizes	0	5	2	15	4	15	1	4 ※※
Places Self	0	0	0	22	0	2	0	22
Clarifies	0	0	0	22	0	1	2	21
Approaches/Starts								
Disagrees	0	7	0	15	0	5	0	19
Transitions	0	6	0	16	0	3	0	21
Matches Language	0	3	3	16	4	5	1	14
Heeds	0	1	0	21	2	3	0	19
Gesticulates	1	4	2	15	2	17	1	4 ※※
Questions	0	3	1	18	3	4	0	17
Concludes/Disengages								
Produces Speech	0	1	2	19	5	12	3	4 ※※
Acknowledges/Encourages	0	2	1	19	5	15	1	3 ※※
Expresses Emotion	0	11	1	10	3	16	0	5
Turns Toward	0	2	1	19	1	12	2	9 ※※
Speaks Fluently	0	21	1	0	1	21	0	2
Times Duration	0	22	0	0	1	21	0	2
Takes Turns	0	16	2	4	1	21	1	1
Replies	0	16	1	5	0	22	0	2
Regulates	1	18	1	2	2	17	3	2
Looks	0	7	2	13	2	20	2	0 ※※
Times Response	0	19	1	2	0	23	0	1
Benefits								
Accommodates								

文献 18, p212, Table C-1 を改変。

Fig. 1 ESI高得点群と低得点群に見られる観察された社会交流技能の傾向

7.4.1 両群で差が見られた社会交流技能

「Produces Speech 話を生む」「Gesticulates 身振りで伝える」「Looks 見る」「Acknowledges/Encourages 認め, 励ます」「Empathizes 共感する」などの社会交流技能は, ESI 高群で「有能」と採点されたものが多く, ESI 低群では「非効果的」と採点されたものが多かった。

7.4.2 両群で同じ傾向がみられた社会交流技能

「Places Self 自分を位置付ける」「Matches Language 言語を合わせる」「Clarifies はっきりさせる」などの技能は, 両群とも「有能」と採点されたものが多かった。一方「Speaks Fluently 流暢に話す」「Replies 返答する」「Times Response 返答を調節する」「Takes Turns 交替する」などの技能は, 両群ともに「非効果的」と採点されたものが多かった。ESIの27の社会交流技能には難易度が設定されている¹⁸⁾。ほとんどの対象者が上手に行えるものは容易な社会交流技能であり, 多くの対象者が非効果的な遂行を示すものは, より難易度の高い社会交流技能であることを示す。本研究のこの結果は, 社会交流技能の難易度に一致する結果であった。

7.5 社会交流技能の主観評価と客観評価

主観評価であるKiSS-18と客観評価であるESIの両方が測定できた22名について, 社会参加に関する質問紙の結果をKiSS-18, ESIの結果と合わせて述べる。

アルバイトの業種別の経験の有無にKiSS-18の統計学的有意差はみられなかったが, ESIに関しては, 軽労働 ($p=0.0245$), 特殊技能 ($p=0.0257$) を経験した学生が, 経験していない学生よりも有意に高い結果となった。アルバイトを経験した学生は, 経験していない学生に比べてKiSS-18 ($p=0.0444$), ESI ($p=0.0284$) ともに有意に高い結果となった。アルバイトの頻度と最も長く継続した期間は, 両測定値とも有意差はみられなかった (Table 4)。

所属した集団については, 習い事の経験のある学生のみが, 経験のない学生に比べてESIが統計学的に有意に高かった ($p=0.005$) (Table 5)。集団における役割経験では, イベントや活動のとりまと

Table 4 アルバイト経験におけるKiSS-18とESIの比較

KiSS-18合計	家庭教師	ESI測定値	KiSS-18合計	重労働	ESI測定値
64.5(64.25-64.75)[64-65]	経験あり(2)	1.45 ± 0.49	65(63-67)[61-69]	経験あり(2)	1.6 ± 0.0
56(51.5-63.5)[34-79]	経験なし(20)	1.17 ± 0.33	56(51.5-64.25)[34-79]	経験なし(20)	1.15 ± 0.33
	販売			特殊技能	
60(54.75-64.75)[52-68]	経験あり(8)	1.2 ± 0.32	63(62-64)[61-65]	経験あり(2)	1.7 ± 0.14 ※
55.5(49.25-64.5)[34-79]	経験なし(14)	1.19 ± 0.36	56(51.5-64.25)[34-79]	経験なし(20)	1.14 ± 0.31
	飲食			接客	
57(52-65)[42-79]	経験あり(13)	1.2 ± 0.35	60(55-64)[47-67]	経験あり(9)	1.25 ± 0.28
59(53-61)[34-69]	経験なし(9)	1.18 ± 0.34	54(50-65)[34-79]	経験なし(13)	1.15 ± 0.38
	軽労働				
67(64-68)[61-69]	経験あり(3)	1.6 ± 0.0 ※			
55(51-63.5)[34-79]	経験なし(19)	1.13 ± 0.32			

表内左 KiSS-18 は平均値 (25% - 75%) [最小値 - 最大値] で表示。

表内右 ESI は平均 ± 標準偏差を表示。* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

Table 5 集団所属におけるKiSS-18とESIの比較

KiSS-18合計	集団への所属	ESI測定値	KiSS-18合計	学習塾	ESI測定値
59(53-65)[34-79]	経験あり(21)	1.2 ± 0.34	60(55-64)[34-69]	経験あり(9)	1.12 ± 0.36
42(42-42)[42-42]	経験なし(1)	1.0 ± 0.0	54(52-65)[42-79]	経験なし(13)	1.24 ± 0.33
	生徒会			ボーイスカウト ガールスカウト	
57(49-65)[47-69]	経験あり(5)	1.16 ± 0.35	64(62.5-64.25)[61-67]	経験あり(2)	1.6 ± 0.0
59(53-64)[34-79]	経験なし(17)	1.2 ± 0.35	56(51.5-64.25)[34-79]	経験なし(20)	1.15 ± 0.33
	子供会・町内会			習い事	
55(52-60)[47-69]	経験あり(13)	1.11 ± 0.3	60(54-66)[49-79]	経験あり(15)	1.32 ± 0.28 ※※
64(54-65)[34-79]	経験なし(9)	1.31 ± 0.37	52(44.5-60.5)[34-65]	経験なし(7)	0.91 ± 0.29

表内左 KiSS-18 は平均値 (25% - 75%) [最小値 - 最大値] で表示。

表内右 ESI は平均 ± 標準偏差を表示。* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

Table 6 役割経験とKiSS-18とESIの比較

KiSS-18合計	リーダー	ESI測定値	KiSS-18合計	交渉	ESI測定値
60(52.25-68.25)[34-79]	経験あり(8)	1.28 ± 0.4	63.5(58.5-67.5)[54-69]	経験あり(4)	1.45 ± 0.17
58(52.25-62.5)[42-67]	経験なし(14)	1.14 ± 0.31	56(50.5-63.75)[34-79]	経験なし(18)	1.13 ± 1.35
	企画			参加	
48(47.5-48.5)[47-49]	経験あり(2)	1.05 ± 0.07	53(51-58)[42-63]	経験あり(7)	0.94 ± 0.26
59.5(53.75-65)[34-79]	経験なし(20)	1.21 ± 0.35	61(54-66)[34-79]	経験なし(15)	1.31 ± 0.31 ※
	人や物の管理			参加のみ	
57(45.5-59)[34-61]	経験あり(3)	0.96 ± 0.55	61(54-65)[34-79]	ほかの役割経験(17)	1.28 ± 0.33 ※
59(52.5-62)[42-79]	経験なし(19)	1.23 ± 0.3	52(50-53)[42-59]	参加のみ(5)	0.9 ± 0.2
	イベントや 活動のとりまとめ			より社会交流技能を 必要とする役割	
※※ 67(64-68.5)[61-79]	経験あり(7)	1.48 ± 0.2 ※※	62(54.25-66.5)[34-79]	経験あり(14)	1.35 ± 0.31 ※※
54(49.5-58)[34-65]	経験なし(15)	1.06 ± 0.31	52.5(49.75-57.5)[42-64]	経験なし(8)	0.92 ± 0.19
	準備調整				
62.5(60-65)[57-68]	経験あり(4)	1.12 ± 0.36			
54.5(50.5-64.5)[34-79]	経験なし(18)	1.21 ± 0.34			

表内左 KiSS-18 は平均値 (25% - 75%) [最小値 - 最大値] で表示。

表内右 ESI は平均 ± 標準偏差を表示。* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

めを経験した学生は、経験していない学生よりも KiSS-18 ($p=0.0008$), ESI ($p=0.00389$) ともに有意に高かった。集団において、何らかの役割を経験してきた学生は、参加目的で集団に所属したことのある学生 ($p=0.0146$), あるいは参加のみの学生より ($p=0.025$), ESI が有意に高かった。リーダー、イベントや活動のとりまとめ、交渉の「より社会交流技能を必要とする役割」を経験した学生は、経験していない学生に比べて、ESI が有意に高かった ($p=0.0027$) (Table 6)。日常的に交流することの多い交流相手の年代は、両測定値ともに有意差はみられなかった。

KiSS-18 および ESI について Spearman の順位相関係数を求めたところ、順位相関係数は 0.605 であり正の相関が認められた ($p=0.000137$) (Fig. 2)。

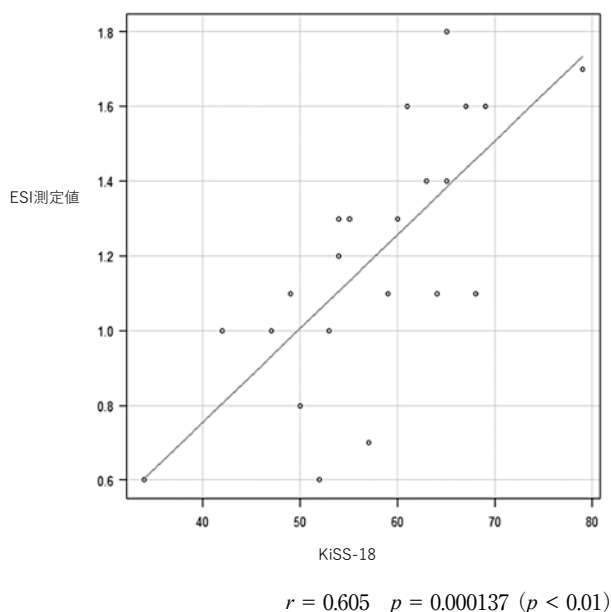


Fig. 2 KiSS-18とESI測定値の相関

8 考 察

8.1 社会参加における役割経験が社会交流技能に与える影響

今回の調査では、アルバイト経験のある学生は、経験のない学生に比べて KiSS-18 と ESI とも統計学的に有意に高かった。大学生のライフスタイルと精神的健康、社会交流技能の関係を包括的にとらえることを目的とした研究では、アルバイトを継続して行っている群が、「ときどきしている」、あるいは

「していない」と答えた群に比べて KiSS-18 が有意に高い結果¹⁹⁾ となっており、本稿における調査結果はこれを支持する結果になったと思われる。この研究では、サークル活動の有無による社会交流技能の統計学的有意差はみられなかったため、アルバイトの経験はサークル活動よりも社会交流技能の影響が強い可能性があるとしており、この点でも本稿の結果と一致していると思われる。

アルバイトの経験は、取り扱う商品や業務上の技能よりも、コミュニケーションに関連するスキルの習得に貢献することが、学生および企業担当者ともに支持された研究²⁰⁾ がある。この調査では、学生が経験したアルバイトの業種は飲食、販売、接客関係が中心で、本稿の調査でも、多くの学生がこれらの業種をアルバイトとして選択し経験している。顧客やスタッフとの直接的コミュニケーションが業務遂行上求められ、業務に習熟することが、社会交流技能の習得に直接影響したと考えられる。

集団内において、イベントや活動のとりまとめを経験した群は、それ以外の役割を経験した群より KiSS-18 ならびに ESI が統計学的に有意に高い結果となった。横山は、大学のクラブ・サークル、委員会において部長など役職につく大学生を対象とした研究の中で、リーダーとしての自信と、社会交流技能等との関係を調べた²¹⁾。調査の結果、課題遂行における自信と、他者関係における自信とが、社会交流技能の高さと相関関係にあった。さらに横山は、リーダーの役割として「所属団体内の部員に限らず、自身の所属団体の活動に必要なことについて、部外者と検討・交渉したり、話し合いをすることが求められる」とし、様々な人と円滑に関わることでできる社会交流技能が必要だ²²⁾ と述べている。本稿の質問紙では、リーダー、イベントや活動のとりまとめ、交渉の3つの役割を個別の選択肢として取り扱ったが、横山の述べるリーダーとしての役割に一致すると考える。学生が所属した集団の成員や関係者と交流を重ね、異なる考えや立場を持つ人々と意見を交換し、とりまとめる役割経験をしたことが、これと異なる役割を経験した学生に比べて、社会交流技能が有意に高くなった要因ではないかと思われる。

以上の結果から、役割経験が社会交流技能に与える影響が大きいことが示唆された。Kielhofner は、役割には社会的に共通する台本があり、台本は、行為者が役割にふさわしい態度や行動をとることができるようガイドする²³⁾、と述べている。ある役割に求められる遂行のパターンが、社会的に共通するイメージとして存在しており、行為者は、自分が適切に振る舞うことができ、役割を果たすことができたかどうかを、自分だけでなくイメージを共有する周囲の人々の反応や、直接評価されることで判断する。アルバイトや集団での役割行動を通してこのプロセスを経験することが、社会交流技能の発達を促進すると考える。

8.2 本研究の限界と今後の課題

今回の研究では、3年次生は「基礎臨床実習（3週間の評価実習）」の前後1ヶ月に調査を行なったため、実習の前に調査を受けた学生と、実習後に受けた学生とでは、実習経験の影響によって自己の社会交流技能に対する見方に差異が見られた可能性がある。また、両学年とも横断的方法でデータを収集したため、社会参加と社会交流技能の因果関係については明らかにしておらず、対象も少数で結果を一般化することはできない。より多数の対象者に質問紙と主観評価の調査を実施すること、社会交流技能を必要とする役割を経験できるように計画された介入プログラムによって、社会交流技能に向上が見られるのか、縦断的研究によって社会参加と社会交流技能の因果関係を明らかにすることが必要である。

9 結 論

OT 学生の社会参加と社会交流技能の関係において、アルバイトを経験した学生は、していない学生よりも社会交流技能の主観評価ならびに客観評価が統計学的に有意に高かった。所属した集団において、イベントや活動のとりまとめを経験した学生は、経験していない学生よりも、社会交流技能の主観評価、客観評価ともに有意に高い結果となった。社会交流技能の主観評価と、研究者の観察による客観評価の結果には正の相関関係があった。活動や集団における役割が、OT 学生の社会交流技能にとって、より

重要であるという示唆が得られた。

10 文 献

- 1) 世界作業療法士連盟. 世界作業療法士連盟の声明書 (吉川ひろみ訳). 日本作業療法教育研究 HP, 入手先 <<http://www.joted.com>>, (2017/10/6)
- 2) 日本作業療法士協会教育部. 作業療法教育ガイドライン (案). 日本作業療法士協会 HP, 入手先 <http://www.jaot.or.jp/pre_education/yousei.html>, (2017/6/8)
- 3) 渥美恵美, 大淵憲一, 稲垣成昭, 勅使河原麻衣. 社会的交流技能実習事前教育プログラムに関する研究 - 社会的交流技能自己評価 (SA) 尺度 Ver 2 作成と因子分析 -. リハビリテーション科学 (紀要) 2008 ; 4(1) : 11-19.
- 4) 日本作業療法士協会養成教育部. 作業療法臨床実習の手引き 第4版. 日本作業療法士協会 HP, 入手先 <<http://www.jaot.or.jp/wp-content/uploads/2012/08/rinshoujishshuVer.422203251.pdf>>, (2017/11/24)
- 5) 長家智子. 看護学生のコミュニケーションに関する研究 - 生活体験と集団行動体験とコミュニケーション能力との関係に焦点を当てて -. 九州大学医学部保健学科紀要 2003 ; 1 : 71-82.
- 6) 井芹まい. 大学生の社会的資質・能力に関する近年の研究動向 - 国内における心理測定尺度に注目して -. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 2016 ; 24(1) : 93-103.
- 7) 原修一, 内川義和, 立石修康, 砂子澤裕, 倉内紀子. 異なる医療専門職を目指す学生交流をツールとした保健科学部の実践的取組. 九州保健福祉大学研究紀要 2010 ; 11 : 135-140.
- 8) 楠永敏恵. 失語症者の社会参加の実態と課題 文献検討から. コミュニケーション障害学 2016 ; 33 : 135-147.
- 9) 岡本秀明. 高齢者の社会活動の概念定義が活動参加率に与える影響 - 高齢者の社会活動の測定に関する研究 -. (会). 老年社会科学 2013 ; 35(2) : 223.
- 10) 増田公香. 蜂須賀研二: ICF と社会参加. MB Medical Rehabilitation. 152. 15-19. 2012.
- 11) 世界保健機関 (WHO). International Classification of Functioning, Disability and Health ; 2001. [障害者福祉研究会 (編). 国際生活機能分類—国際障害分類改訂版. 中央法規出版 ; 2003. p.11-18]
- 12) 菊池章夫. KiSS-18 研究ノート. 岩手県立大学社会福祉学部紀要 2004 ; 6(2) : 41-51.
- 13) 藤本学, 大坊郁夫. コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究 2007 ; 15(3) : 347-361.
- 14) Anne G Fisher. Occupational Therapy Intervention Process Model: A model for planning and implementing top-down, client-centered, and

occupation-based interventions: Fort Collins, CO;2009.p.163-171.

- 15) 独立行政法人日本学生支援機構. 平成 26 年度学生生活調査結果. 日本学生支援機構 HP, 入手先<http://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei_chosa/index.html>, (2017/11/24)
- 16) 菊池章夫. 社会的スキルを測る:KiSS-18 ハンドブック. 川島書店. 2007.
- 17) 菊池章夫. KiSS-18 研究ノート. 岩手県立大学社会福祉学部紀要 2004 ; 6(2) : 41-51.
- 18) Anne G. Fisher, Lou Ann Griswold. Evaluation of Social Interaction.Third Edition: Three Star Press, Inc; 2014.
- 19) 緒方智宏, 豊増功次. 大学生のライフスタイルと社会的スキル及び精神的健康との関連. 久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要 2010 ; 18(1) : 11-18.
- 20) 酒井佳世. キャリア教育の視点による学生アルバイトとインターンシップの比較－地方私立大学の学生アルバイトによる習得スキル調査と分析－. インターンシップ研究年報 2013 ; 16 : 21-29.
- 21) 横山孝行. リーダーの自信に関する諸要因の検討－大学のクラブ・サークルリーダーを対象として－. 東京工芸大学工学部紀要 2014 ; 37(2) : 1-6.
- 22) 横山孝行. 合意課題エクササイズを用いたクラブ・サークルリーダー学生の社会的スキルの育成. 東京工芸大学工学部紀要 2015 ; 38(2) : 1-9.
- 23) Gary Kielhofner.A Model of Human Occupation : Theory and Application. 4th edition:Wolters Kluwer Health / Lippincott Williams & Wilkins; 2008. [山田孝 (監訳). 人間作業モデル [理論と応用] 改訂第 4 版. 協同医書出版社 ; 2012. p.64-73]

Relationship between social participation and social interaction skills in occupational therapy students

Atsushi YAMAKAWA¹

Abstract

To clarify the relationship between occupational therapy students' social participation and social interaction skills, we conducted a questionnaire survey on the former, and subjective and objective assessments of the latter based on KiSS-18 scores and observation using the Evaluation of Social Interaction (ESI) scale, respectively. Among the 85 third- or fourth-year university students specializing in occupational therapy, 36 responded to the questionnaire, and filled out the KiSS-18 sheet. The ESI-based observation was feasible with 22.

Students with experience of working part-time showed significantly higher KiSS-18 scores than those without such experience. Similarly, students with experience of playing roles that require advanced social interaction skills, such as group leaders, event/activity managers, and negotiators, showed markedly higher social interaction skill-related scores. There was a strong correlation between the total KiSS-18 score and ESI-based observation results, suggesting the importance of playing roles in social activities and groups for occupational therapy students to improve their social interaction skills.

Key words: occupational therapy student, social participation, social interaction skills, Evaluation of Social Interaction (ESI)

¹ Hiroshima Cosmopolitan University, Faculty of Health Science, Department of Rehabilitation
3-2-1 Otsukahigashi, Asaminami-ku, Hiroshima 731-3166, Japan